

【D年】聖霊降臨節第12主日(2024年8月4日)

## 【旧約聖書日課】士師記 6章36～40節

<sup>36</sup>ギデオンは神にこう言った。「もしお告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっているなら、<sup>37</sup>羊一匹分の毛を麦打ち場に置きますから、その羊の毛にだけ露を置き、土は全く乾いているようにしてください。そうすれば、お告げになったように、わたしの手によってイスラエルを救おうとなさっていることが納得できます。」<sup>38</sup>すると、そのようになった。翌朝早く起き、彼が羊の毛を押さえて、その羊の毛から露を絞り出すと、鉢は水でいっぱいになった。<sup>39</sup>ギデオンはまた神に言った。「どうかお怒りにならず、もう一度言わせてください。もう一度だけ羊の毛で試すのを許し、羊の毛だけが乾いていて、土には一面露が置かれているようにしてください。」<sup>40</sup>その夜、神はそのようにされた。羊の毛だけは乾いており、土には一面露が置かれていた。

## 【使徒書日課】ヨハネの手紙一 5章1～5節

<sup>1</sup>イエスがメシアであると信じる人は皆、神から生まれた者です。そして、生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。<sup>2</sup>このことから明らかなように、わたしたちが神を愛し、その掟を守るときはいつも、神の子供たちを愛します。<sup>3</sup>神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません。<sup>4</sup>神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です。<sup>5</sup>だれが世に打ち勝つか。イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。

## 【福音書日課】

## ヨハネによる福音書 7章1～17節

<sup>1</sup>その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。ユダヤ人が殺そうとねらっていたので、ユダヤを巡ろうとは思われなかった。<sup>2</sup>ときに、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた。<sup>3</sup>イエスの兄弟たちが言った。「ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。<sup>4</sup>公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。」<sup>5</sup>兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。<sup>6</sup>そこで、イエスは言われた。「わたしの時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備えられている。<sup>7</sup>世はあなたがたを憎むことができないが、わたしを憎んでいる。わたしが、世の行っている業は悪いと証ししているからだ。<sup>8</sup>あなたがたは祭りに上って行くがよい。わたしはこの祭りには上って行かない。まだ、わたしの時が来ていないからである。」<sup>9</sup>こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

<sup>10</sup>しかし、兄弟たちが祭りに上って行ったとき、イエス御自身も、人目を避け、隠れるようにして上って行かれた。<sup>11</sup>祭りのときユダヤ人たちはイエスを捜し、「あの男はどこにいるのか」と言っていた。<sup>12</sup>群衆の間では、イエスのことがいろいろときさやかれていた。「良い人だ」と言う者もいれば、「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。<sup>13</sup>しかし、ユダヤ人たちは恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった。

<sup>14</sup>祭りも既に半ばになったころ、イエスは神殿の境内に上って行って、教え始められた。<sup>15</sup>ユダヤ人たちが驚いて、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と言うと、<sup>16</sup>イエスは答えて言われた。「わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。<sup>17</sup>この方の御心を行おうとする者は、わたしの教えが神から出たものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 士師記 6章36～40節

<sup>36</sup>ギデオンは神に言った。「もしお告げになったように、私の手によってイスラエルを救われるというのであれば、<sup>37</sup>私は羊一匹分の毛を麦打ち場に置きます。もしその羊の毛にだけ露が降りて、地面が乾いているのであれば、お告げになったように、私の手によってイスラエルを救われるということをお納得いたします。」<sup>38</sup>すると、実際そのようになった。翌日、朝早く目覚めたギデオンが羊の毛を絞ると、露が流れ出て、鉢が水でいっぱいになった。<sup>39</sup>ギデオンは神に言った。「どうかお怒りにならないでください。もう一度だけ言わせてください。ぜひとも、もう一度だけ羊の毛で試させてください。羊の毛だけは乾いていて、地面には露が降りるようにしてください。」<sup>40</sup>すると、神はその日の夜、そのようにされた。羊の毛だけは乾いており、地面には露が降りていた。

## ヨハネの手紙一 5章1～5節

<sup>1</sup>イエスがキリストであると信じる人は皆、神から生まれた者です。生んでくださった方を愛する人は皆、その方から生まれた者をも愛します。<sup>2</sup>神を愛し、その戒めを守るなら、それによって、私たちが神の子どもたちを愛していることが分かります。<sup>3</sup>神の戒めを守ること、これが神を愛することだからです。その戒めは難しいものではありません。<sup>4</sup>神から生まれた人は皆、世に勝つからです。世に勝つ勝利、それは私たちの信仰です。<sup>5</sup>世に勝つ者とは、イエスが神の子であると信じる者ではありませんか。

## ヨハネによる福音書7章1～17節

<sup>1</sup>その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。ユダヤ人が殺そうと狙っていたので、ユダヤを巡ろうとはされなかった。<sup>2</sup>時に、ユダヤ人の仮庵祭が近づいていた。<sup>3</sup>イエスの兄弟たちが言った。「ここをたってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。<sup>4</sup>公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。こういうことをしているからには、自分を世に現しなさい。」<sup>5</sup>兄弟たちも、イエスを信じていなかったのである。<sup>6</sup>そこで、イエスは言われた。「私の時はまだ来ていない。しかし、あなたがたの時はいつも備わっている。<sup>7</sup>世はあなたがたを憎むことはできないが、私を憎んでいる。私が、世の行っている業は悪いと証ししているからだ。<sup>8</sup>あなたがたは祭りに上って行くがよい。私はこの祭りには〔まだ〕上って行かない。私の時がまだ満ちていないからである。」<sup>9</sup>こう言って、イエスはガリラヤにとどまられた。

<sup>10</sup>しかし、兄弟たちが祭りに上って行った後で、イエスご自身も、人目を避け、ひそかに上って行かれた。<sup>11</sup>祭りのときユダヤ人たちは、「あの男はどこにいるのか」と言って、イエスを捜していた。<sup>12</sup>群衆の間では、イエスのことがいろいろとささやかれていた。「良い人だ」と言う者もいれば、「いや、群衆を惑わしている」と言う者もいた。<sup>13</sup>しかし、ユダヤ人たちを恐れて、イエスについて公然と語る者はいなかった。

<sup>14</sup>祭りもすでに半ばになった頃、イエスは神殿の境内に上って行き、教え始められた。<sup>15</sup>ユダヤ人たちが驚いて、「この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなによく知っているのだろう」と言うと、<sup>16</sup>イエスは答えて言われた。「私の教えは、私のものではなく、私をお遣わしになった方のものである。<sup>17</sup>この方の御心を行おうとする者は、私の教えが神から出たものか、私が勝手に話しているのか、分かるはずである。

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・8月4日「聖霊降臨節第12主日」の日課主題は「信仰による勝利」。8月第1日曜日は教団の行事暦で「平和聖日」と定められている。

・旧約聖書日課は、「士師記」から、士師ギデオンの説話の一場面。使徒書日課は、「ヨハネの手紙一」から、信者を「神から生まれた者」として位置づける教説を述べる箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、仮庵祭に際して主イエスがエルサレムに上られるまでの経緯を描く箇所。

**旧約日課(士師記6章より)**

・「士師記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第二巻。ユダ・イスラエルのカナン定住時代を物語る「イスラエル正史物語」の中で、ヨシュアによるカナン侵入時代とサウルから始まる王国時代の間を占める時代を、「士師の時代」としてまとめて物語っている(士師2:8~23)。通説としてこの時代は、カナン地方に定住したイスラエル12部族が独立性を保ちつつ、外敵への対処などを契機に「士師」が立てられて部族連合的な結びつきを強めて行った時代とみなされることが多い。実際には、12部族を含む諸部族が合従連衡を繰り返しながら抗争を繰り返していた時代として描かれており、「士師の物語」は、そのような時代の各部族で「英雄物語」として伝承された説話と位置づけられる。

・「士師」と訳されるヘブライ語「シャパト」は、「出エジプト記」ではモーセが舅エトロの助言によってそれまで一人で行っていたが民を組織化して小単位ごとに行わせるようにした「裁き」の働きを担う者を指す。「士師記」には、「士師」に相当するとみなせる人物が12組13人登場するが、「士師」と呼ばれているのは9人のみである。日課箇所の「ギデオン」については、「士師」と呼ばれていない。

・「ギデオン」の物語は、6~9章を占めており、「士師記」中で「サムソン」の物語と並んで大部となっている。「ギデオン」は「マナセ族」出身の祭司の子として描かれ、外敵である「ミディアン人、アマレク人、東方の諸民族」(6:33)に対抗するために自身のマナセ族のほかアシェル族、ゼブルン族、ナフタリ族を結集して戦い勝利したとされる。その際に、結集した戦士たちの中から三百人だけを選び出して勝利した逸話で知られる。日課箇所は、この戦いに挑むにあたって、ギデオンがまず神に「しるし」を求めたことを描く逸話箇所。

・「ギデオン」の人物像は、日課箇所が描くように、神に対する敬虔な姿勢を特徴とするものとして描かれる。これは、導入の物語(6章)で「父のものであるバアルの祭壇」を壊してみせる逸話でも強調されている。また、ミディアン人らとの戦いの後に民から王として治めることを求められた際にそれを断る逸話(8章)など、謙虚さも強調されている。

・「ギデオン」は、このように「敬虔な指導者」として理想化されて描かれながら、「士師」の呼称で呼ばれていない。おそらく、「サムエル記」が描く「ダビデ」の場合と同様に、元来は「英雄的な軍事指導者」としての実像を伝えるものであった伝承説話が徐々に典型的な英雄伝承として理想化された人物像で物語られるようになったのだろう。「ギデオン物語」が、ギデオンの死後の出来事としてその息子の一人アビメレクの逸話(他の息子たちを殺して自ら「王」に即位するが、結局排斥される)を置くように、ギデオンは一種の「王族」を形成していたものとして描かれており、「士師記」が一代限りの指導者として列挙する「士師」とは異なる実像を示唆している。「士師」の呼称をギデオンに用いないのは、そのような実像ゆえであろう。

・それでも「ギデオン」が「士師」の中に並べ置かれるのは、「マナセ族のギデオン王家」が、サウル以前のイスラエル諸部族抗争史において無視できない意義を持っていたと考えられたからかもしれない。マナセ族は、後の「イスラエル王国」の中核となるエフライム族の兄弟部族と位置づけられ、サウルの出身ベニヤミン族とも「ヨセフ族」の枠組みで同族と位置づけられている。これに加えて、「ギデオン」と並び対照的な士師「サムソン」は、「ヨセフ族」の従属部族の一つ「ダン族」の出身とされており、これらの先人の営みを結集させたのが、元来は目立たない存在であったエフライム族(ソロモン語の北王国「イスラエル」の初代王はエフライム族出身の「ネバトの子ヤロブアム」)であったという歴史観があるのかもしれない。

**使徒書日課(Ⅰヨハネ5章)**

・「ヨハネの手紙一」は、一連の「ヨハネ文書」の中に位置づけられる書簡文書で、「ヨハネ福音書」の編集改訂の経緯を示唆する文書と解されている。一連の「ヨハネ文書」のうち、「福音書」の最末尾には著者を名乗る「弟子」(=「イエスの愛しておられた弟子」?)の記載があり、「手紙二」および「手紙三」は差出人として「長老」が名乗られ宛先人の名も記されているが、「手紙一」には著者・差出人も宛名も記されていない。「手紙一」は、書簡としての書式(冒頭挨拶や末尾挨拶)なども一切欠けており、それが元来は記されていたのに削除されたのかもしれないし、もともと教会内部で回覧する教書として作成されたために書簡形式を欠いているのかもしれない。他の文書との比較から推認すると、後者の可能性が高いかもしれない。

・本書簡は一貫して、主イエスが御子として地上で肉体を持った存在、すなわち「メシア=キリスト」であったことを否定する論を拒み、信仰者が神的な天上性に拘泥して人間的な地上性を軽んじるようなことがないように、と警告している。具体的には、その帰結として「神を愛する人は、兄弟をも愛すべき」(4:21)という天上性と地上性の二重性の確認、ことに地上において「互いに愛し合うこと」が主イエスの第一の掟であると

の確認が、繰り返される。日課箇所も、この信者の二重性を「神から生まれた者」また「神の子供たち」という表現によって繰り返し、この二重性の根拠として「イエスが神の子である」という信仰の確信を示している。

### 福音書日課(ヨハネ 7 章より)

・日課箇所は、主イエスが「仮庵祭」に際してエルサレムに上るまでの経緯を描き伝える箇所。「ヨハネ福音書」は、主要なユダヤの祭りを構成上の大きな枠組みを示す場面設定としており、伝統的な「祭り」を主イエスの出来事の中で再解釈することを試みていると考えられる。「仮庵祭」は、ユダヤ三大祭りの一つで、「モーセ物語」の中で描かれる「荒れ野の旅」の故事を記念する秋の祭り。現代に続くユダヤ教の伝統では、直前の「新年祭」および「贖罪日」に続いて祝われる、もともと祝祭感に満ちて盛大に祝われる祭となっている。エルサレム神殿が機能していた時代には、特に「水取りの儀式」と呼ばれる祭儀が衆人の注目を集めて執り行われていたとされる。これは、祭司がエルサレム城外の池(貯水池)から水を汲み、人々が行列を為す中で神殿まで運び上げ、祭壇に振りまくというもので、その際には煌々と灯火がともされて見守る人々を照らしたと言われる。これらの祭儀を踏まえて、「仮庵祭」にエルサレムに入られた主イエスの告げられた教えが記されており、「水」や「光」が重要な鍵語とされる言説が展開されている。また、このことが為される中で、主イエスに敵意を抱くユダヤ指導層が殺害の謀議を進めたことが並行して描かれていく。

・日課箇所は、その「仮庵祭」に主イエスが出向かれるのかどうか、という問題が生じていたところから物語り始められている。ここでは、主イエスがユダヤ・エルサレムに赴くことを躊躇されたことに対して、特に主イエスの兄弟たちが批判的な態度を示し、むしろエルサレムに赴いて堂々と自分の主張をしたらよと促していることが描かれている。主イエスの兄弟たちが主イエスの意図とは異なる主張をしていたとみなせる描写であり、共観福音書と比べても主イエスと兄弟たちとの間に大きな溝があったことを示唆しているように思われる。主イエスの兄弟たちのうち、少なくとも長弟ヤコブと次弟ヨセフは母マリアと共に長兄イエスの宣教活動に同行し(マタイ 27:56)、初代エルサレム教会の構成メンバーになっていた(使徒 1:14)と考えられる。おそらく彼ら、特に長弟ヤコブは、「使徒言行録」や「パウロ書簡」が、使徒たちが宣教活動のためにエルサレムを離れた後のエルサレム教会で指導的役割を担っていた人物である。初代教会時代、エルサレムを離れ、しかしそれほど遠方ではないサマリア地方やガリラヤ地方を拠点として活動していたとされる「使徒ヨハネ」の教会は、主の兄弟ヤコブらの指導下にあるエルサレム教会との間で、主イエス(の教え)の理解において相違があり、またエルサレムに留まるかどうかという点においても考えに相違があり、相手に対する批

判的な見方がここにも反映されているのかもしれない。主の兄弟ヤコブらの下にあるエルサレム教会はエルサレムに留まることを良しとしていたのに対して、使徒ヨハネらの下にある「ヨハネの教会」は、エルサレムから出て行き、サマリア人やガリラヤ系ユダヤ人を教会に招くことを良しとしていたと考えられるのである。

・4 節「公に」、13 節「公然と」と訳されているギリシア語「パレーシア」は、「ヨハネ福音書」が好んで用いる用語で、後段 26 節ほか計 9 例が「公に／公然と／はっきりと」の訳で見られる。原義は「すべて発声すること」で、包み隠さず全てが語られていることを示唆しているのだろう。

### 来週の誕生日 (8 月 4 日～10 日)

#### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-206「七日の旅路」( I 56) は、「アメージング・グレース」(21-451 番)を作った 18 世紀英国教会の司祭ジョン・ニュートンの作詞。彼は、若いころに奴隷船船長として難船経験をして回心し、伝道献身生活に入った。曲は、米国人マーカス・ウェルズの作詞作曲した別讃美歌から曲だけ採用。この曲で、別歌詞の讃美歌が複数あり、1903 年版『讃美歌』には三つの歌詞で収録。
- ・21-371「このこどもたちが」は、アジアキリスト教協議会(CCA)が 1990 年に出版した新しいアジアの讃美歌集に収められた歌詞で、作詞者クラークについての詳細は知られていない。曲は、『讃美歌 21』編纂に際しての公募に対してこの歌詞のために作曲して応募されたもので、作曲者は音楽教室講師で萩教会オルガニストの山中知子。
- ・21-444「気づかせてください」は、『讃美歌 21』編纂に先立つ新作公募に応募・採用された日本人の作詞作曲の讃美歌。作詞の木原は国語科教諭を経て牧師になった。作曲の米野は鎌倉雪ノ下教会出身の音楽家でフィリピンの大学で教鞭をとっている。

#### 21-206「七日の旅路」

### Safely Through Another Week

1. Safely through another week / God has brought us on our way; / let us now a blessing seek, / waiting in his courts today; / day of all the week the best, / emblem of eternal rest, / day of all the week the best, / emblem of eternal rest.
2. While we pray for pard'ning grace, / through the dear Redeemer's name, / show thy reconciling face; / take away our sin and shame; / from our worldly cares set free, / may we rest this day in thee, / from our worldly cares set free, / may we rest this day in thee.
3. Here we come thy name to praise, / let us feel thy presence near; / may thy glory meet our eyes, / while we in thy house appear: / here afford us, Lord, a taste / of our everlasting feast, / here afford us, Lord, a taste / of our everlasting feast.
4. May thy gospel's joyful sound / conquer sinners, comfort saints; / may the fruits of grace abound, / bring relief for all complaints: / thus may all our Sabbaths prove, / till we join the church above, / thus may all our Sabbaths prove, / till we join the church above.